3 創造的な復興と地域フェスティバルの設計図
――現代の視点で芸能の魅力を引き出すために

1 創造的な復興と地域フェスティバル

日本全国各地で国際芸術祭やアートフェスティバルが開催されています。その開催規模や内容もさまざまです。国内外の多様なジャンルのアーティストを招き，世界中から観光客が訪れるようなものから，特定の芸術表現を主軸するものや，地域の歴史・文化を活かしたものまで，実に多様な地域フェスティバルの形があります。

今回，事例としてご紹介するのは三陸国際芸術祭です。副題を「現代の視点で芸能の魅力を引き出すために」としておりますが，三陸国際芸術祭は，郷土芸能（民俗芸能）を主軸においた芸術祭となります。三陸国際芸術祭は，東日本大震災大津波で大きく被災した三陸沿岸地域を舞台とした芸術祭です。東日本大震災からの「創造的な復興」をミッションとしている点では，他の芸術祭との成り立ちや目的が少し異なるかもしれません。しかしながら，明確なミッションを掲げ，そこから事業の内容と組織体制づくりを行うという点においては，どのような事業にも共通することがあると考えます。私は現在，三陸国際芸術祭のディレクターとしてプログラムづくりに携わる立場，開催地の文化施設のプロデューサーとして現場の運営を担う立場，そして岩手県芸術文化コーディネーターとして運営組織づくりに携わる立場として関わっております。今回はこの「プログラムづくり」「現場運営」「組織づくり」3つの視点から，芸術祭を解体して，ご説明したいと思います。

2 三陸国際芸術祭のはじまり

東日本大震災後，さまざまな復興支援プロジェクトが行われました。そのなかでNPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（以下，JCDN）理事長の佐東範一氏が，被災地を訪れながら，全国のダンス関係者にどのような支援が可能なのか，現地でのコミュニケーションを図りながら「習いに行くぜ！東北へ」というプロジェクトをスタートさせました。これは被災しながらも豊かな芸能が息づく三陸に，国内外の振付家やダンサー・アーティストなどが訪れ，芸能を習うというものでした。踊りに行くのではなく，習いに行くという機会は，地域の芸能団体にとっても新たな交流の機会として，活動の活性化の契機となり，現代のアーティストたちにとっては新しい文化との接触により新しい創造性との出会いの機会となりました。こうした国内外のアーティストたちの驚きの声と，数百もの芸能が息づく三陸の豊かさに，新たな復興の可能性を見出し，2014年にスタートしたのが三陸国際芸術祭です。初年度より国際交流基金アジアセンターを事業のパートナーとして，現在の2021年に至るまで，ほぼ毎年開催（新型コロナウィルス感染拡大により，2019年度の冬プログラム及び，2020年度は中止）してきました。当初はJCDN主催で4市町村9日間からスタートした芸術祭も，2018年度には復興を象徴する三陸鉄道社長の中村一郎氏が委員長を務め，15市町村と4つの民間団体が連携する三陸国際芸術推進委員会を主催とし，三陸沿岸の広域を会場とした数ヶ月に及ぶ会期の長い取り組みとへシフトしました。

3 三陸国際芸術祭のプログラム

プログラムは，三陸の郷土芸能と，世界の芸能，そして現代のアーティストによる相互交流を特徴としています。

観客へ向けたプログラムの種別としては，大きくは「鑑賞型」と「体験型」に分類され，さらに

これらは参加するアーティスト・芸能団体が交流することを念頭において企画されます。

「鑑賞型のプログラム」としては，地域の劇場や特徴的な歴史文化施設のほか，景勝地などの野外，列車のなかでの上演も行われています。こちらは宮古市で開催されている事例をもとに紹介させていただきます。

写真①は花輪獅子踊り，開催地域の郷土芸能（民俗芸能）による実演です。宮古市民文化会館で地元の神楽・鹿踊り・剣舞等の上演を行いました。

写真②は招聘アーティストによる実演です。こちらはコンテンポラリーダンスの振付家・ダンサー（中村蓉）が，宮古市で滞在製作した演目を宮古市役所（新庁舎）にて上演した様子です。

また国登録有形文化財旧東屋酒造店の蔵（シネマ・デ・アエル）を舞台に，海外（アジア）の芸能団体や地元の芸能団体による実演や映画の上映などが行われました。写真③はインドネシア・ジョグジャカルタ初の女性舞踊家によるランパック・ブト団体による実演です。

「鑑賞型のプログラム」の中に，観光と連動した事業も開催しています。写真④は，三陸芸能列車という企画で，三陸地域を縦断する三陸鉄道の車内で実演やレクチャー・地元の食事等を味わうことができるプログラムなども開催し，新しい文化と観光を結びつける企画開発も行なっております。

次に「体験型のプログラム」を紹介します。体験プログラムでは，本芸術祭の契機ともなった「習う」を主軸においた企画を実施しております。郷土芸能団体の集落などを訪ね，その集落の芸能を見るだけでなく，芸能を習い，交流することを目的に開催しています。このプログラムには一般の参加者のみならず，招聘した海外の芸能団体やアーティストも参加します。写真⑤は，中心市街から車で 50 分ほど離れた山間の集落を訪ね，神楽・笠踊り・鹿踊りを伝承する旧小国地区の芸能団体から，インドネシアの芸能団体が，装束を身につけ，神楽を習う様子です。最後は，直会にて締めくくられました。

また「習う」は郷土芸能団体が教えるという形

写真①　花輪獅子踊り

写真②　現代のアーティスト

写真③　海外団体 クリンチン・マニス

写真④　三陸芸能列車

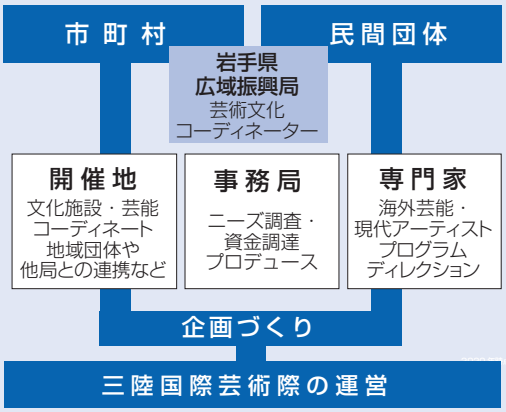
写真⑤　観て習う芸能（末角神楽）

ばかりではありません。訪れた海外の芸能団体（主にアジア）もその芸能を郷土芸能団体に教え，互いに習い合い交流する機会も設けられます。この三陸とアジアの芸能団体の交流から派生し，三陸とアジアの芸能団体による国際共同制作作品の上演も行われました。2020 年はコロナ禍の影響を受け，芸術祭は開催されませんでしたが，国内外のアーティストを対象としたオンライン芸能体験事業を開催するほか，2021 年にはオンラインでの交流プログラムのノウハウを活かし，TOKYO 2020NIPON フェスティバルの共催文化プログラムとして，三陸の芸能団体とインドネシアの芸能団体，カンボジアの芸能団体による作品製作を実施し，現在も作品の映像配信を行なっています。

4 三陸国際芸術推進委員会の設立

次に三陸国際芸術祭の主催・運営する体制について，ご説明していきたいと思います。2018 年より JCDN に加え，市町村や三陸の沿岸の民間団体が連携する三陸国際芸術推進委員会が設立されました。この設立にあたっては，岩手県の文化芸術コーディネート制度等を活用し，官民の連携が進められました。岩手県は 4 つの広域圏ごとに地域振興局があり，その局ごとに地域の文化芸術をサポートする仕組みとしてこの制度があります。推進委員会の設立にあたっては沿岸振興局と県北振興局の文化芸術等の担当者及び，沿岸の文化芸術コーディネーターを担う NPO 法人いわてアートサポートセンターが中間支援団体として，岩手県内の市町村や地域団体等との橋渡をするとともに，JCDN とともに推進委員会設立の準備を行いました。この中間支援体制は，現在も推進委員会にそれぞれも参加するという形で続いています。文化芸術をめぐる地域施策はさまざまです。芸術祭の運営にあたっては，各地域の状況や制度を踏まえつつ，協働関係者を増やし，地域ごとのフェスティバル運営体制を築くことが持続可能な体制づくりにおいて重要なことだと考えます。

〈図1〉 構成団体の主な役割



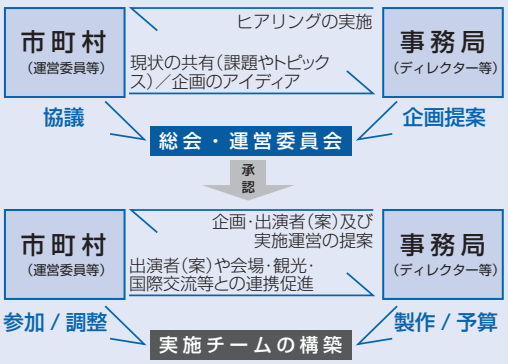
5 三陸国際芸術推進委員会による運営体制

本芸術祭の舞台となる 15 市町村のある三陸沿岸は，最短距離にして約 250 キロメートル以上，総面積約 5,600 平方キロメートルに及びます。これは東京都と神奈川県を合わせた大きさを上回る面積となります。推進委員会では，開催地となる市町村，中間支援を行う県，専門的集団としての民間団体の代表者等によって構成され，そのミッションを共有しながら，それぞれ役割（図 1 参照）を担いながら，広域での開催にあたります。

事業づくりにおいては，各地域の地域特性や課題・芸能の状況を踏まえ，市町村と民間団体が協議し，企画づくりと，その運営にあたるチームづくり（図 2 参照）を行います。

これらは地域ごとによって企画や市町村・民間団体が担う役割が異なります。上記の写真等で示した宮古市でのプログラムの開催を例にすると，宮古市は郷土芸能を所管する教育委員会が宮古市内の出演団体等コーディネートし，そのほかの市の関係部局との調整・当日運営などにあたり，国際交流課・国際交流協会等が通訳ボランティアの手配や在市の外国人への PR，観光協会等が観光客向けの PR の協力やホテル情報を提供します。また宮古市民文化会館が他の施設での開催イベントを含む，企画運営・会場設営（テクニカル）や

〈図2〉 事業づくりのプロセス



制作・広報・票券管理を担い，そして芸術祭事務局が企画調整・進行管理・企画運営や，海外団体招聘・アテンド多言語広報・海外や都市部でのPRを担います。その他にも三陸鉄道とともに三陸芸能列車の運行を行うなどプログラムごとにパートナーとともに実施します。

6 ミッションと展開

通常，芸術祭の運営を行う場合は芸術祭の開催を行うための実行委員会を設置しますが，三陸国際芸術祭では祭の「実行委員会」は設立せず，三陸での包括的な文化芸術による創造的な復興を目指す「推進委員会」として組織を立ち上げました。「東日本大震災で被災した三陸地域の，郷土芸能・文化芸術の魅力を生かした創造的な復興を目指すこと，また文化産業・観光などとも連携して，交流人口並びに定住人口の促進を行うこと。」などを目的とし，三陸国際芸術祭は，その「企画開発事業」のひとつとして位置付けています。芸術祭で取り組まれる事業はある種のモデル事業として実施し，地域での持続可能な取り組みとして展開していく役割を持っています。また推進委員会の事業としては「企画開発事業」に加え，多言語化を含めた三陸の芸能や文化を発信する「情報発信事業」と，芸術祭等で開発されたプログラムを持続可能なものへと発展させる「効果促進事業」等があります。

「企画開発事業」では，アーティストが三陸に滞在し，三陸の芸能を習いながら，自身の作品を制作するアーティスト・イン・レジデンス事業（三陸芸能短期留学）を実施。「情報発信事業」として数百とも言われる三陸の郷土芸能の団体情報や催事の情報を収集し，多言語発信する芸能マッピング事業などを行なっています。

三陸芸能短期留学
アーティスト・イン・レジデンス・プログラム（A.I.R.）

三陸芸能マッピング
Sanriku Geinoh Mapping

7 未来への設計図として

地域でのフェスティバルや芸術祭は，その地域ごとに目的や意味合いを持つものです。東日本大震災では多くを失いました。10年が経過し，ハードの整備は着々と進みましたが，人口の流出には歯止めがかからず，郷土芸能をはじめとした豊かな生活文化もその継続が危ぶまれています。日本の多くの地域において，確かな衰退を感じながら，なぜフェスティバルを開催するのでしょうか。地域でのフェスティバルをイベントとして捉えるのか，それとも地域の未来を示すひとつの設計図として捉えるのか。その選択が，いま企画するものに問われているのではないでしょうか。

（坂田雄平）